北國新聞　平成10年（1998年）9月28日（月曜日）

キノコ採りの男性転落死

吉野谷　沢に降りる途中、滑る

二十七日午前十一時半ごろ、石川県吉野谷村中宮の水鼻谷付近で、松任市千代野西六丁目一〇ノ一〇、会社員大出徹さん(五〇)が林道から転落した。一緒にいた仲間が約七キロ離れた同村中宮スキー場に救助を求め、県消防防災ヘリが出動、大出さんは午後三時二十分ごろ、ヘリに救出され、鶴来町古町の公立鶴来病院に収容されたが、頭部打撲などで間もなく死亡した。

鶴来署の調べでは、大出さんは渓流釣り仲間三人とともに、山遊びを兼ねてキノコ採りに来ていた。大出さんは林道からロープを使って約三十㍍下の沢に降りる途中、二十㍍降りた地点で足を滑らせて転落したらしい。

石川県消防防災ヘリから病院に搬送される大出さん
＝27日午後3時28分、鶴来町の手取川河原

11井上 12 大出 13 南 13 橋正　13吉田　15奥名　13柴田　13大島
大出様の2週間前の笑顔です

平成10年9月27日、吉野谷村の山中において
不慮の滑落で亡くなった　故　大出　徹君に
12期の同期として心より哀悼の意を表します。

弔辞

（30日の葬儀において捧げたものです。）

12期　赤地　賢一

大出君とはワンゲルの同期でした。
卒業後一度逢ったきりでした。
20数年振りに逢った彼は　この遺影でした。
好い顔になって写っているおっちゃんの大出でした。

大学一年の夏合宿に　彼と同じパーティーでした。
南アルプスを歩き続けました。
重い荷物にも　冷たい水での食器洗いにも
不平不満を　一言も言いませんでした。
暮れゆく富士を眺めながら　時にニコニコと笑い
朴訥に話してくれました。
白山の春山の吹雪を　共にくぐり抜けました。
ニッコウキスゲのお花畑で　昼寝も楽しみました。

爾来、大出は　一歩一歩踏みしめて
誠実に　優しく　生きてきたと思います。

私達の同期は図らずも　大出君だけが金沢に残り
他は各地に散っています。
一堂に会することもありませんでした。
ワンゲルの集いが有る時、
いつも彼一人が同期の代表で　出席してくれました。

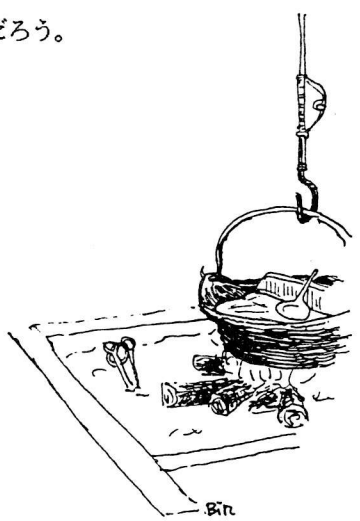
つい先だっての医王山の集いで　彼が言ったそうです。
　俺達の同期も一度集まるように
　俺が声をかけないといけないのかなぁーと。
それが　こんな形で集まるようになるとは…

昨晩　河辺が言いました。
大出は体を張って俺達を集めてくれたんじゃないか。
これからは　集い逢って、大出を語ろうと。

　大出は　山が好きだったと思います。
素直に　自然体で溶けこんでいたと思います。
また　この地も好きだった。　白山と医王山の在る金沢が。
それ以上に　惚れ込んでいた松世さんと　二人の息子がいる
この地を　愛していた。
将土君と　泰土君、名の通り二人は大地に根を張り
素晴らしい若人になりました。
実に気丈に　しっかりと　昨日、謝辞を述べました。
胸うたれました。

　大出。　松世さんと、将土君、泰土君を、
おまえを思う多くの人を　残して逝くのは、
悔しいだろう。　無念だろう。
仕事も　まだまだやりたかっただろう。

　そして、おまえがいなくなって
俺達も　心から悔しさが残りました。
もっと　語りあっておけばよかった。
もっと　山も一緒に歩きたかった。
日本酒も　呑みたかった。
　　にこにこと　朴訥に話す　おまえと…。



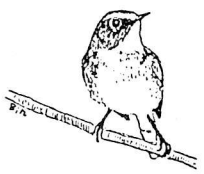
12期　小西　外士郎

大出君。君の訃報を聞いて、一番先に頭に浮かんだのは、
あの少しはにかみながら　白い歯を出して
にこやかに人と話していたあの顔を、
もう見ることができず、　又、
ゆったりとした　少々越後訛のあるあの声を、
もう聞くこともできないのか
ということだった。

2年の春合宿の際、白山の大汝に登り、
寒くて長い道程を　一緒に帰って来た時、
みんな疲れて　黙々と歩いていたが、
そして特に君は　片方のワカンを無くし、
尚いっそう苦労し　遅れ気味になっていたが、
それでも休憩時に　あのにこやかな顔で話をし、
パーティーを和ませていたことを
思い出す。

新潟県の高田から　金沢へ来て
それ以来　金沢に根をおろし、
金沢生まれの同期より長い期間
白山をはじめ　石川の山々を愛し、登っていた。
流れ旅人みたいな私からみると
羨ましい限りだったが…。
やはり、友がいなくなるのは
本当に寂しい。

ワンゲル歌集にも載っているように
何時かケルンを積みに
白山の渓谷に　行きます。



大出君の思い出

12期　津田　伸生

大出君とは、昭和43年の2年性の時の夏合宿で同じパーティーでした。リーダーは畦山さんで、たしか後に彼の奥様になられた松世さんも一緒だったように思います。

ルートは、折立から薬師岳を登って薬師沢に下り、そのまま黒部源流を詰めて三又蓮華岳へ至り、槍見温泉へ下るものでした。

ですが、彼の印象は夏合宿本番よりも、それに先立つトレーニングの際、倉谷ベルクハイムから二又川へ行った時の方が、はっきり思い出されます。

その時は雨のため犀滝へは行けず、昼食時に濡れた衣服を乾かすため、途中の河原で盛大な焚火をしました。彼は「俺は土木工学科だから、ここで石を焼いて風呂を沸かせてみせる」と言いだし、せっせと火に石をくべだしました。結果は時間切れで、一畳ぐらいのプールが生温かくなっただけでしたが、皆で足を入れて彼の努力を讃えました。

その他、上越市出身の彼はスキーが得意で、クラブの時代には、赤倉、池の平へ誘ってもらい、パラレルターンを教えてもらいました。

また、卒業後も東京で何度か会い、彼が働いていた東京の地下鉄千代田線、福井の真名川ダム、カリマンタンなどの工事現場の話を聞かせてもらったこともあります。

彼との記憶は、山そのものより、何気ない山の生活や町での記憶の方が鮮明で、それぞれで知った彼の人となりが、その後の私の人生にもいい形で反映されているように思います。

私は、今年の9月26日に、24年余を過ごした東京から金沢へ戻ってきました。クラブの同期で金沢在住は彼と奥様のみなので、転居の翌日連絡をとろうと思った矢先に、彼の訃報をテレビで知り、まったくの運命の悪戯に、完全に言葉を失ってしまいました。

少し日がたった先日、子供達を連れて四半世紀ぶりに医王山に登りました。秋晴れに映える紅葉の白禿山頂から、高三郎や大笠などの犀奥から白山へ続く稜線が見渡せました。

上で書いたことは、この時浮かび上がった記憶の一端です。まだ、彼とは山や町で出会えるような気がしてなりません。

心からご冥福をお祈りいたします。

12期　田中　茂

齢50の大台に入り、
今までの人生を振り返る時期に、
大出（あえて同期のよしみで、呼び捨てを
許して下さい。）の訃報を聞いた時、
不慮の事故とはいえ、
我々の仲間の悲しい別れが
現実に起きているのだと
夢から醒めたような気持ちです。

精神的に余裕のない社会生活に追われ、
便りのないのが元気な証拠と、
なまくらを起こしていたのが悔やまれます。

振り返れば、30年前の友人との思い出は
人生の中でも、最も充実していた時期でした。

これからは、同期の仲間と、
墓前で大出を交えて昔話をしたり、
酒を酌み交わしたりし、
親交を深めていきたいと思います。

亡き大出君

12期　宮島　孝司

大出君、山中にて亡くなられるとは、さぞや無念であったろう。若い子息を残して。

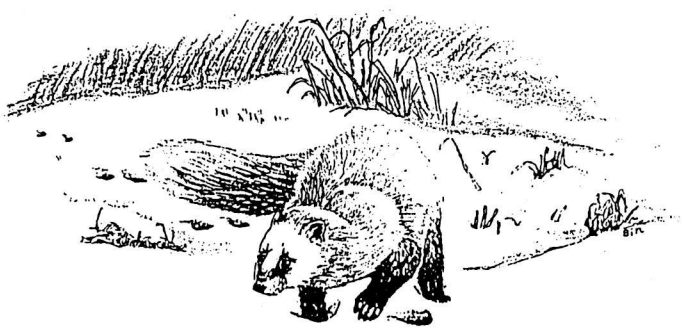
小西君、河辺君より、夜中にこの悲しい知らせを受けた時、驚き、一瞬信ずることができなかった。その直後、30年前のことが脳裏に、昨日のことのように鮮やかに浮かび上がってきました。

当時、彼の下宿にて、しばしば夜中何人かの部員と共に談話をしたり、飲みに行きました。それがどんなにあの頃の私の心を和ませたか。思うに、彼は人を、友人を集める何らかの資質を持っていたのではないか。それは彼の人徳だったのではないでしょうか。彼と共に居る時、又、さらに何人かの部員と共にある時、当時の私の不安・孤独はどんなに癒されたことか、今も決してそのことを忘れることはありません。

今となっては、彼と共に杯を重ねることもできなくなった。あまりにも悲しい！無念！

けれども、キスリングを背負って歩く彼の姿は私の脳裏に焼き付いている。私の心の中では永遠に生きている。

最後に、奥様である松世様、及び子息の皆様には、慎んでお悔やみ申し上げます。一日も早くこの悲しみを乗り越えられ、強くたくましく生きて下さるようお願い申し上げます。



故 大出 徹 氏を偲ぶ

11期　長岡 正利

10月末の穏やかに晴れた日曜日の朝，大出様（奥様）から，「主人の遺品を整理していたところ･･･」との電話を戴きました。最初はどなたが何のことかと判らず，委細をお聴きするのも悪いようで，戸惑いつつの要領を得ない受け答えとなったものの，それが小生が初めて聞いた訃報でした。後日，別に伺ったところによれば，その１ヶ月前に，雄谷川水晶谷での墜落との由で，享年50歳。

考えてみれば，氏とは卒業以来一度もお会いしてはいない。その後に歩まれた人生とその業績について，あるいは事故の新聞記事にあった氏の渓流釣りのことなどについても，小生は何をも語ることはできません。

事故のことを知った半月ほどの後，11月なかばに白山麓に向かった折，遭難の地である雄谷川の奥を望む地まで行って来ました。

晴れるでもなく降るでもなく，時に柔らかな陽の差す晩秋の日。やがて初雪を迎えるであろう山々はあくまでも静かで，暫し佇んでいるうち，目前の，大笠山から西に続く尾根を残雪期に氏とともに辿った日々のことが次第に鮮かに浮かんできました。

今はもう30年ほども前のこと。その年は雪が多く，蛇谷沿いでは至る所に残っている巨大な底雪崩の堆雪　　を乗り越えて，今では辿る人とてもないだろうが，尻高谷取水口からの岩尾根を苦労して直登。その翌日は笈ヶ岳を越えて，無雪期の笹原からは想像できないような，大笠山千丈平の波打つ大雪原。天気はさほど良くはなかったものの，ちょうど正面遙かに時折見え隠れしていた白山。

この山歩きの最後は，目前の，今回の遭難地の北側に連なる尾根を辿って，左に見えている中宮の聚落にようやくの思いでたどり着いたこと。その辺りでは，出作りの畑の跡に，見事に一面にカタクリの花が咲いていたこと。それが夕方近くなって，ようやくに霽れ始めた空から差し始めた陽光の中でえもいわれぬ色に見えたこと。つい数時間前までの薄墨色の残雪と寒々としたブナの幹，ヤッケから出た髪に次々と水滴が結ばれていた冷たい濃霧の世界に較べて，何と暖かく感じられたことか。

30年近くの間，まったく思い起こすこともなかった風景の記憶。30年前の雪の大笠山の上に広がり始めた空の碧さのことなど。書き始めれば次々に記憶は甦り来たり，今も更に，つい数日前のことの如くに思われます。

あれから，日とともに氏の面影は忘れがたく，というよりは却って，かつての氏の笑顔と声の記憶ともに，30年ほど前の白山麓での日々が次々と想い浮かんでくるが故に，敢えて拙文を寄稿させていただきました。

大出君・熊・岩魚

0期　田村　昭夫

大出君の訃報を村田泰恵さんから受けた。信じられなかった。

死は突然訪れる。私は今年の盆に会津の山道で子連れ熊に襲われた。峠で鉢合わせとなり、突進してきた母熊に、咄嗟にマウンテンバイクを楯にぶち当てた。彼女は谷に転げ落ち、私は後も見ず逃げ帰ってきた。もしあの時、息子のマウンテンバイクを引っ張っていなければ、応

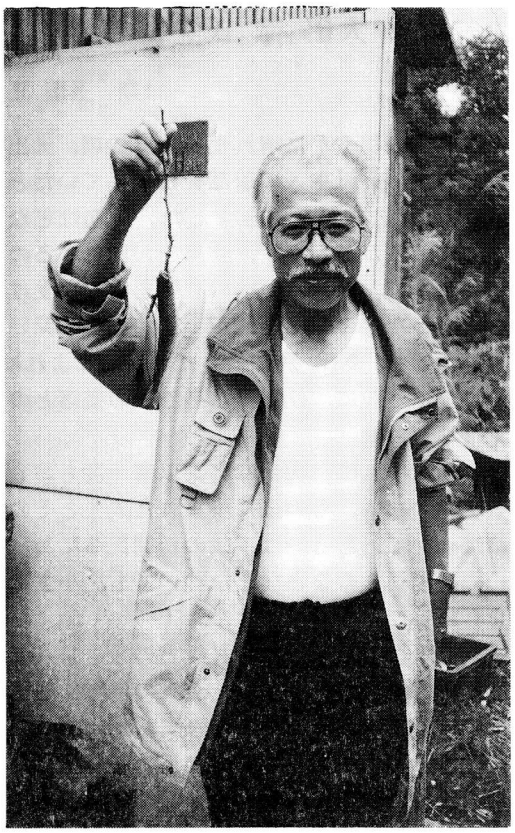
戦する術もなく、私の命は終わっていたかもしれない。

生死は紙一重である。大出君の死もそのようなアクシデントだったと思いたい。

大出君の葬儀に出てから三日後、倉谷の山小屋酒場に出掛けた。皆が便所建設や道整備をやっているのに、何もしないのは気がひけるので、大出君が残していった釣り道具で、岩魚釣りにでかけることにした。釣れる当てもなかったのに、30分もしない間に手応えがあり、15cm程の岩魚が釣れてしまった。岩魚にとっては、まさにアクシデントだった。

鰓から小枝を差し込んで吊るした所、岩魚は頭から血を流して苦しんでいる。私は思わず、「大出！」と叫んでしまった。そして三日前に見た納棺前の大出君の顔を思い出して泣いた。大出君は崖から落ちて、四時間意識があったという。頭から血を流しながら、薄れゆく意識の中で、君は何を思っていたか。

君はいい奴だった。いい奴程、神仏に好かれて早く逝くのだ。もうすぐ俺も行くから待っていてくれ。



「いつも同じ服では…」とおめしかえで撮影に臨まれた教祖様。戦果は骨酒に。

１９９８ 秋

13期　辰野　隆義

台風７号の爪跡はすさまじい。

その１）駒帰から車で数分の箇所の道路が大きくえぐり取られ、通行止めとなっている。土砂は除かれ、下部にコンクリート基礎が打ってあるので、それ以前からのものかもしれない。

その御蔭で車をここで乗り捨て、30年振りにダム手前の道を歩くことになる。舗装はしてあるので昔よりは歩き易いが、手にビニルパイプと罐ビールの袋を下げ、軽いとはいえ背中にそれなりの荷を背負ってのいつもより２時間長い歩行は、睡眠不足の体に応えた。

さすがに舟田さんは日頃の鍛練の賜物で、全員の食糧の入った重いザックを背負い、ペースを崩すことなく歩いている。田村大先輩は少し遅れ気味ながら、これまたいつものペースで悠々と歩いておられる。私と大島君はというと、この４人の中では、外観上はともかく、かなりきつそう。

その2）今日の天候は素晴らしい。久々の晴天、秋晴れである。この天候に「騙された」のが大島君である。

せっかく持参した長靴をそのまま車内に残し、スニーカーで軽快に出発となった。初めのうちはそれでよかった。快調である。ところが、しばらく行くうちに、状況は一変した。

山から本流へ流れ込む小さい沢という沢が、土石流で埋まり、行き場を失った水は道路上を走り、水浸しなのである。御蔭でダムに着く頃には、彼のスニーカーの中はぐっしょりと濡れてしまった。

その後ダムを過ぎても状況は同じで、ガレ場の切れ込みはさらに浸食をきわめていた。

その3）ようやく吊り橋を渡り、ほっと一安心。長かった歩きももう一息。旧倉谷部落に差しかかり、途中アケビ、クリも大量に収穫し、気持ちも軽く前進する。

ところが、河原にさしかかった時、皆唖然とした。毎年、秋の山小屋酒場は、ススキや背丈の伸びた雑草の中を、ベルクハイムに向け最後の行進と相場が決まっていたものである。それがしかし、1本の草もないのである。わずかに残る茎は横倒しになって河原の砂に埋まり、まるで賽の河原の如く、砂と石だけのだだっ広い空間に変貌していたのである。本流はいつもの場所に川床高く流れている。そしてもう1本、山際に沿ってあった水溜まりが、立派に小川となって砂丘を横切っていた。あまりの変わり様にキョロキョロと見廻しながら歩いていると、ベルクハイムの登り口を通過しそうになった。

その4）ベルクハイムに到着。いつものことながら、登りの階段を息を切らせながら足を運び思うのは、水が出ているだろうか、ということである。今回は、…予想通り、水は出ていなかった。

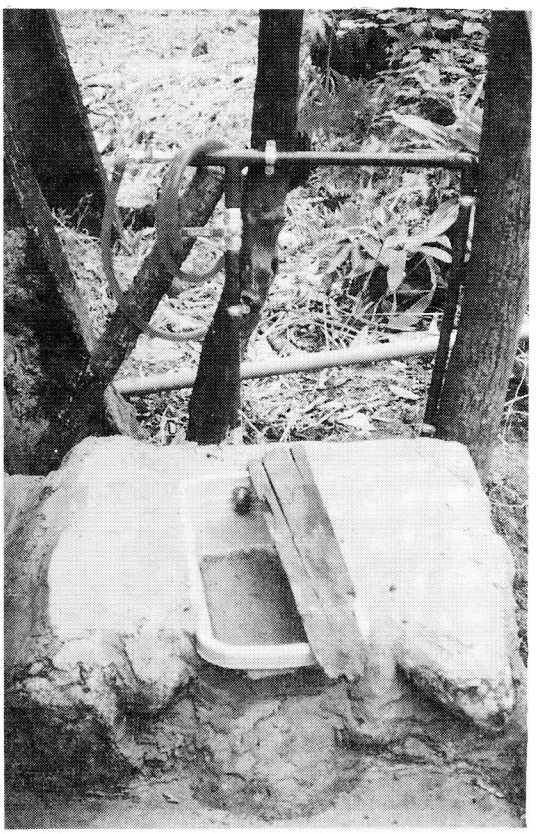
荷物を下ろしてすぐ、私と大島君は工具を持って水場の沢へ。そして、ここでも今日何度目かの唖然。

取水用のポリパイプは大きく下流へ流され、折れ曲がっている。岩も流されて、沢のよどみが増えている。取水工事の時、あれ程苦労してよどみ場を探し、ツルハシやスコップでよどみ場を作ったのに、今ではどこでも取水できそうだ。二人で以前取り付けたステンレスの取水カゴを探したが、跡形もなくなっている。しっかりと据え付け、上に石も乗せておいたのに。春に調整して一夏を越した今の時期なら、再び半分以上砂に埋もれているはずのあたりである。それが跡形もなく、パイプからひきちぎられて流されてしまっているのだった。

とりあえず応急処置をし、水が出るようにはした。来春はもう一度、水場の整理をしなければならない。

その5）それでもしっかり便所の骨組は残っていた。

これからは便所の話です。



一穴式水洗トイレ　KUWVVバージョン

今回の準備段階で最も困ったのは、便器の調達でした。大島君から、いろいろ探したが希望の便器がないとの連絡を受けたのは、数日前のこと。陶器製ならいくらでもあるが、なにしろ運搬が難しいのと、冬凍ったり、何かの拍子に割れた場合に取り替えできないということで、樹脂製のものという大前提があったのです。

ところが、窮すれば通ず。彼が探してきた代替品は、プラスチック製のプランターであった。なるほど、形はよく似ているし、運搬にも支障なかった。

その底に丸い穴を開け、配管の上に乗せて固定する。春の酒場の時に運び上げておいた石や砂が、本当に有り難かった。これがなければ二人ではギブアップだったろう。

その時、河原の方から異様な叫び声が聞こえた。川へ岩魚釣りに出掛けた田村さんであった。ひょっとしたらと思い、大声で呼んでみたが反応なし。ま、いいか。あの人のことだから、万が一ダムまで流されても自力で帰ってくるだろうと作業を続ける。しばらくすると、にこにこしながら田村さんが手に岩魚を一匹ぶら下げて帰ってきた。疑似針で岩魚を釣った嬉しさの余り発した雄叫びだったらしい。心配して損した思い。

作業は順調に進み、便器の固定も終わり、水洗用の給水配管にとりかかった頃、13期吉田君と15期佐野君が到着した。吉田君へはダムから道路状況を電話してあったため、覚悟済みで入山してきたからか、私のように疲れきった様子はみえないようだ。それをいいことに、即作業に加わってもらい、便所の仕上げ作業に入る。配管を接続し、バルブ、カランを取り付け、モルタルで表面をなで付ける。

しばらくすると薄暗くなってきたので、今日の作業を打ち切った。明朝私と大島君は用事で早立ちするため、明日の作業を二人に伝達し、終了とした。

その6）我々が作業をしている間、小屋の中で、掃除、片付けをしていた舟田さんの独壇場である夕食。今回は松茸バージョンとかで、昼がまず松茸炊込みご飯。夕食はそれが栗御飯に変わり、松茸は土瓶蒸し風汁物で登場。丁度秋祭なのだそうで、鰻巻、べろべろと祭料理も並ぶ。それに、名古屋から参加の佐野君が近江町で仕入れてきてくれた秋刀魚が香ばしく焼きあがり、ハマチは刺身となって盛りつけられて、実に秋満喫の献立でありました。街でもこんな豪華版にはなかなかお目にかかれない。いつも

3田村　13吉田　15佐野　13辰野　13大島

いろいろ気配りしてくれる舟田さんありがとう。おっと、忘れていけないのが、雄叫びの岩魚。倉谷産岩魚の骨酒をまわし飲みなんて、これぞ究極の秋の山小屋酒場。田村先輩ありがとう。話は当然、一週間前に亡くなられた大出先輩の思い出に終始したのでした。おりしも十四夜の名月が冴え渡り、絶え間ない瀬音と、虫の音の合奏。しみじみと語るにふさわしい秋の夜でありました。十分堪能しつつも睡眠不足続きの体は、いつのまにか眠りの幕をおろしていたのでありました。

その7）翌朝、体は眠っていたいと訴えているが、叱咤激励起き上がり、さっそく便所の様子を見に行く。まだコクリートは乾いていないがそっと水を流してみる。うん、上々だ。これで安心して後を任せ下山できる。

朝食（松茸入りおじや）の後、残りの作業を頼み、便所完成の姿を確認せずに下山。6時30分小屋発。

30分ほど歩いた時、人の気配が。15期の奥名君と出会う。昨日入る予定が、奥さんの親戚の葬儀が入ってダメになり、それでも今朝、日帰りだけでもと出てきたらしい。5時には通行止めの場所に着き、意を決して歩いてきたという。よくもまあ一人で暗い中をと思う。

その8）今回の小屋酒場は台風のお土産のハプニングもあったが、いつもながら楽しい、心身共にリフレッシュできたものでした。無理して空けた土曜一日（何しろ、二週間前の総会の時も前日キャンセルせざるをえなかったくらいの状態）。あとで仕事に支障がでなければと思いつつも、やっぱり秋満喫のかけがえのない一日だったと思えるのでありました。残念ながら、光輝く便所の雄姿を見ることはできなかったが、それは春の楽しみにとっておこう。

皆様も、いつでも我ベルクハイムへお越し下さい。水回りも整い、自然いっぱいのリフレッシュゾーンです。

もちろん山小屋酒場にもご参加下さい。酒がうまくなる程度の作業をやってもやらなくても可。遅刻も早立ちも可。フリーで、楽しく、ちょっと山グルメのワンゲル酒場です。

その9）最後に先日山で急逝された12期大出さんに心から御冥福をお祈り申し上げます。

1997.6.5　北陸中日新

水中酵素利用の移動トイレ

『プラザはつめい』開発　10月めどに商品化目指す

石川県内の中小企業十五社でつくる異業種交流グループ「協同組合プラザはつめい」（代表・森岡吉男日拓産業社長）はこのほど、バクテリアの働きを活性化する水中酵素を使い、汚水や汚物を分解、処理する移動式のトイレ「スイトピア」を開発した。トラックの荷台での輸送ができるため、建築工事現場やキャンプ場などへ売り込む予定で、十月をめどに二百万円前後の価格での商品化を目指している。

浄化槽や下水処理設備を必要としないのが特徴で、便器下に設けたタンクの水の中に、高温好気菌のバクテリアと水中酵素を混ぜてやることで、汚水や汚物を水と二酸化炭素に分解する仕組みとなっている。タンク内には、ヒーターも設け、常に水温を三五度前後に保てるようにしてあるほか、エアノズルから酸素を送り込んでおり、酵素の作用を活発にしてある。トイレ一つ当たりで、一日当たり十人分に対応できる。

スイトピアは、軽量鉄骨ラーメン構造で、重さ約五百キロ。横三・四メートル、奥行き一・七七メートル、高さ二・五七メートルの大きさで、男性用と女性用の大小便器二個と男性用小便器一個、手洗い器一セットで構成。

今後は、臭気ファンや室内灯への電力を提供するために、太陽電池を活用した省エネタイプや便器が一つだけついた個室タイプの商品開発も検討している。

（田村教祖様提供）

北アなどでは既に使用されているようです。トイレの次は、水力発電にチャレンジという噂もあります。

'９８秋期山小屋酒場だより

遅くなり申し訳ありません。原稿やっと出来ました。

11月８日に50kmハイクなる行事に参加してまいりました。昨年に続き２度目。奥三河地方の鳳来町から蒲郡市役所まで実質45kmをただただ歩くだけの一日ではありましたが、秋晴れの豊川沿いの道は結構見るべき所も多かったので、満足しております。朝９時から17時まで、ほぼ休みなしの８時間でした。

平成１０年１０月４日（土）
～５日（日）

参加者　田村昭夫（０期）　辰野隆義（13期）
大島良治（13期）　吉田穂積（13期）
舟田節子（15期）　奥名正啓（15期）
佐野哲雄（15期）

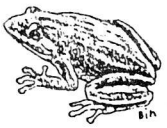
報告者　佐野　哲雄

・ＢＨの「さんま」

味覚音痴なのか、ただ単に忘れてしまったのか、何事も悪い思い出は思い出さないように馴らしてしまったのかワンゲルでの食事でどうにも食べられないというような思い出は浮かんでこない。反対に美味しかった食物で真っ先に思い出すのはＢＨでの「さんま」である。先代のＢＨの最後の小屋じまいの時だから２５年も前のことになる。その場にいたメンバー全員が感激した様子は当時のベルクハイムに置いてあったノートに図解入りで舟田さんが書かれていたように思います。その感激を差し入れてくれたのは、奥名君。今回は日曜日の日帰りでの参加でした。それ以来、あの感激をもう一度と機会をうかがっていたのですが、やっと、条件がそろったのでお返しを実行にうつしたのですが、如何がだったでしょうか？

勿論、割烹「舟田」の献立は今回も素晴らしく松茸丸ごと入りのお吸物、栗ご飯、等々・・

さらに、田村教祖が倉谷川で釣りあげた、いわなの骨酒も加わり、ぜいたくなほどのご馳走でした。こんなご馳走を、僅かな労働奉仕でいただけるのですから（こんなことを書くと事務局長は困惑されるのではとは思いつつも）、まだの人は是非一度、またの人はもう一度、小屋酒場にご参加ください。



・駒帰から３００メートル？

土曜日の後発隊は、７期の村田さん、１３期吉田さんと、私の３人の予定でした。先発隊から吉田さんに入った連絡はショックなものでした。駒帰から３００メートル程先の地点で工事中で車は通れないとのこと。ほとんど駒帰から歩かねばいけないなんて！これを聞いて腰を痛めていた村田さんは残念ながら参加を断念された。村田さんから調理パンを差し入れてもらった２人は、不安を抱きつつも、とにかくＢＨへむかったのでした。駒帰から３００メートルの地点を通過しても工事中の看板は見えず、「もう工事は終わった」だの、「工事中でも何とか通してくれるのでは」とか、都合の良いことばかりを話していたら、発電所の少し上流付近で通行止めになっており、先発の辰野さんの車も駐車してあり、そこからＢＨまで歩かねばなりません。工事現場の道路は山側に70～80cm残して４ｍ×８ｍ位の大きさでえぐりとられており、自転車がやっと通れるぐらいでした。たぶん今夏の豪雨が原因なのでしょう。そのような状態を見て先発の大島さんは中止を本気で考えられた様です。大島さんがおっしゃることは、本気なのか、冗談なのかわからないことがよくあるのですが、私が遠くから参加するので仕方なしに強行した、という内容の話を３回もしてくれたのでしたから。１時間半の歩行の予定が突然倍以上になるのですから無理からぬこと、ましてや資材の歩荷も加われば。それでも予定通り実行されたのは、ＢＨの魅力か、優しさからか？

工期は平成１０年１１月末までの工事なので、来年春の小屋酒場はダムから歩くだけで済みそうです。

・熟達者向け

高三郎の登山道整備も問題を含みつつも進んでいるようですが、思わぬ所で整備が必要な所ができていました。この夏の豪雨と、台風が原因とおもわれる自然のいたずらがいろいろなところに残されていました。先のダムまでの工事箇所もそのひとつですが、ダムから倉谷Ｂ．Ｈの間でも整備が必要と思われる箇所が数箇所出来ており、このままでは、田村教祖曰くの「熟達者向け」のルートになりつつあります。特に、ルートがまるで雪渓のスノーブリッジ状になっているところが２カ所有り、夜間通過は避けたほうが無難です。その他、小さな沢の付近での崩壊部分の整備、下草の刈り込み等は来春の小屋酒場の作業テーマにしたい位です。倉谷や高三郎を利用するワンゲル以外の人に、先を越される前に、整備しようではありませんか。その時は数多くのＯＢの参加をお願いします。

・山小屋のトイレ
今回のメイン作業はトイレの築造で、前回までに資材の調達、荷揚げもほぼ終了しており、便器本体の取付、給排水の配管の仕上げ、囲いの建屋の築造を施工する予定でした。
便器本体は大島さんのアイデアで樹脂製のあるものを代用することになりました。まさにヒット作です。便器の取付は予想以上に体力が必要でした。便器を囲む部分の玉石積み、セメント用の砂、骨材運び、セメント練り、きつい作業が続いたが夕方には給排水のテストまで出来た。柱にクレオソートを塗ったところで今回の作業は終了。来春いよいよ堂々完成、乞うご期待！
さて、ここでクイズです。便器の代わりの樹脂製のあるものとは、何でしょうか。正解者には、ＢＨへ１泊２日の旅ご招待と、この便所の最初の使用権をさしあげます。答をＯＢ一言通信に書いて応募下さい。当選者は来春の山小屋酒場の際の案内にて発表いたします。（辰野　山小屋オヤジ殿、かってに決めました事後承認願います。）

倉谷そして---

15期　舟田　節子

40周年の陰に隠れて、今回はにぎにぎしくとはいかないな---の予想でした。恒例化している方ならともかく、「山小屋酒場もありますよ」とお誘いを重ねてもね---。
ただ、現役の皆さんの方は「部をあげてなら、40周年、小屋作業と一気にやった方が人は集め易い」と40周年の３日後には倉谷入りをしていました。台風５号と遭遇しどえらい目にあったようですが、予定どおり頂上の伐開を終了したとの報告をうけました。
人夫の集まる見込みなし、かつ登山道修復は一応の完遂をみたという訳で、秋の山小屋酒場は小屋作業オンリー。記念行事の思い出を肴に飲むか---辰野さんへ詰めの連絡をと思っていた矢先、大出さんの事故がおこりました。
山小屋酒場の中止は考えませんでした。中止してもそれはお悔やみになる訳ではないし、明日があるといえないのは、誰も同じことだったからです---誰も「どうする？」とは言いませんでした。みんなそれなりに悟っていたのだと思います。

８年前、比田井（石田）さんが亡くなった年。同期会を今年は中止しようかと迷いましたが、だからこそやろうと、増田さんが幹事で静岡で開催されました。比田井さんは突然の死亡ではなく、何度か入退院を繰り返し、末期はまさに命を刻む闘病生活となりました。その為、何度も見舞いに出向いた人、足を向けなかった人と同期の対応にも乱れが出てしまいました。私も手紙ですませた一人です。健康な私が、どんな顔をして、どんな言葉を用意して、死出間近の仲間に面会すればよいのか？怯んでしまい、多忙を優先してしまいました。
そんなもやもやを残したままで会した同期会、酔いが廻ってきた頃に爆発したのでした。おそらく、社会人になってからあんなとっ組み合いをしたのは初めてではなかったでしょうか？もつれあっている者も涙、止めにかかる者も涙で、しまいには皆で泣いてしまいました。
何で死ぬんや！の怒り、哀しみ---が、だからこそ、生きている時間を大切にしなければ、かけがえのない時間を生きなければ---に変わっていきました。
あの時、子守専門になって、体中にみかんを押し込まれていた横井さんまでいなくなって、「華の15期！」の語尾がかすれるような寂しさが心中をよぎります。気落ちした時、仕方がないとあきらめかけた時、彼等のことを思い出し、何と無駄心に迷う自分と叱咤してしまいます。
山小屋だって、行けるんだもの。やめる理由なんてないサ！

10月３日（土）
まぶしいような晴天。大島さんの車に便乗し教祖様と私は小立野キャンパスへ向かう。場違

いなプランターを見つけ、はて奥様にガーデニングのご趣味でもと思ったら、何とこれが便器になるということでありました。（私、これからプランターを見たら、下品に笑っちゃいそうで心配です。）そこから辰野さんに電話したら、まだご在宅で…つつじケ丘と、小立野は非常に近いのだということも納得しました。

さて何度目かの倉谷行きです。何度目かになると、こうして倉谷へ向かっているのも当然の気がしてくるのがまた不思議です。

5年ちょっと前、35周年実行委員会結成のため、地元にいる筈のＯＢに電話をかけまくりました。大島さんの所へも卒業以来初めての電話をかけました。山のような戸惑いと、気恥ずかしさと…でも、これがやれなかったら私はＯＢと名乗る訳にはいかないと、20余年のブランクを越えてかけました…そして、こうやって再び昔の先輩や仲間と倉谷を訪れる日が戻ってきました。夢みたい。夢みたいでありながら、今はもう、このＯＢ会をめぐる人の輪が人生からすっぽり抜けることはとても考えられない。このＯＢ会にかけた時間を他に向けていたとしたら、私はどんな人達と巡り逢えたというのだろう…。

エスティマが急停止する。前方の道路がない！後ろを振り返れば、うっそー、寺津の発電所が見えるではないか！しいて弁護すれば、懸念がなかった訳ではないんです。でも、大出さんの事故にもめげず、やるんだ…の時に、つい、希望的観測に情が走ってしまいました。確認の電話１本、かけるべきでありました。

澄み渡る青空、善男善女は覚悟を決めて歩いたのでありました。背中には例の便器代わりのプランター。思わずククッとなるのをこらえながらの道中は、くるみがコロコロ転がり、時としてスキー場への道路のごとく路面を洗う水流には、飛沫をあげつつの行軍でした。そしてやっぱり切れ込みでは「何時になったら吊橋がつくんじゃ」と悪態をついて、ダムに着きました。

仕事量としては、ここで引き返してもいいくらいでしたが、そこは我慢して、ダムの電話を借りて後発の穂積さんを脅かし、さらに先陣を続行したのでありました。

ダム沿いの道は要補修箇所が何箇所も出現していて、これなら永久に金沢市からの補助金がいただけそうです。治山事業とはなるほど金蔓になるものです。

しかし、ＢＨ下の大変貌は、そんな皮肉がふっとぶほどでした。ますます草木が生い茂り…程度の経年変化だったものが、広々大テントサイトが出現していたのです。我がＢＨは、その昔お寺が建っていた場所なのだそうです。（ＢＨ13号参照）だから、雪崩にも水害にも一応安心とはいえるでしょう。

今回は総会後に加藤さん達が掃除して、次に現役達が使っての後でした。それにしてもすでにカメムシから、ハチからの残骸が転がり、冬近しを告げていました。私は妊婦になれても、人夫には間に合いそうもなく、専ら年越しのお掃除に専念しました。

無人の小屋はなにより生き物達のオアシスになっておりますようで、まずは蛇様がお着替えあそばした跡が２箇所ありましたし、ミイラから、風化したボロボロからがあらゆる隙間から出てきて、かすかに「ギャー」とか「オエー」とか洩らしながら、掃き、拭き清めました。今時の朝シャンが当然の若者達に、小屋を好きになれというのは、やっぱり無理なんだろうなと思いました。じゃあ何故私は好きなんだろう。

好きといって一人で来るほどには物好きにな

れない。仲間との思い出があって、今も仲間がいるから来れるんだ…そう、もう二度と来ることはあるまいとここを後にした日もあります。それがここにいるし、外では、大島さんと辰野さんが漫才みたいな掛け合いをしながら、プロならではの配管に取り込んでいるのでした。雑巾のゴミを窓から払い落としながら、こんなシーンの中にいるなんて、やっぱり夢みたいと思いました。

教祖様は…教祖様は釣り道具を手にして、「釣れもせんのだけど、まあ馬鹿なのがたまにはおるからな」と岩魚釣りにでかけておられました。と、「〇〇ケテエー」のかすかな叫び声。「今、助けてえと聞こえなかったか？」皆手を止めて、下流側を覗き見れど…判明せず。皆それなりに田村さんの「生態」は判っているので、まあ事故ではなかろうと作業を続けました。私も、あの格調高い教祖様が「助けてえ」などという俗語で締め括るとは思えず、もしそうだったら、彼の美学にかけて「やり直し！」と這い上がってこられるはずだし…と思いつつもお姿を拝見するまではちょっと心配でした。幸い教祖様は戦果をぶら下げてお帰りで、感極まられて「オオイデエー」と絶叫されたものと判明しました。一昨年、小屋で教祖様が80日の修行をされた折り、渓流釣りを嗜まれていた大出さんは故郷のコシヒカリを差し入れられたり、岩魚釣りを指南されたり、小屋を訪ねられての親交があったのでした。葬儀の席では静かに涙をふくしかなかった教祖様にとって、ここ倉谷のせせらぎは思いを吐き出すメロディーとなったのでしょう。

さて、明るさの残るうちに食事の用意を。と、穂積さんと、はるばる岡崎からの佐野さんの登場です。小屋って、こうやって、次々人が増えてくるのが嬉しいです。もっと遅くなるかと思ってたのに…そして、すぐ働くのが、これまたすごいですね。

（さて、辰野さん、佐野さんとは重複しないように書きます。でも、佐野さんのクイズについては、他2名がばらしてしまってありますね）

秋刀魚…ただでさえ長くなった道中をよく運んでいただいたものです。ええ、あの時の秋刀魚よっく覚えています。いろいろ落書き帳に図解を書いたのも。奥名さんが買って、道端の雪を冷却剤がわりに入れて、一緒に駒帰から歩きました。あの小屋じまい、みぞれの中で撮った犀川ダムでの写真には高村さんも写っています。

一輪車の中で混ぜると、汚さず、移し替えの手間いらず。人手なし、物なしだと冴えるオツム。

こうやって思い切れば再現できることもあれば、決して再現できないこともあるのが25年の歳月というもの。ともあれ、煙を気にせず焼いた秋刀魚、ハマチの刺身も加わって、北アルプスでビフテキが食べられる時代に堂々渡り合った豪華メニューとなりました。

夜はずっと大出さんの思い出話に暮れました。あの新トレ事故後でピリピリしていた夏合宿に、大出さんは、四年生として同じパーティーにご参加でした。私達一年生の食当に加わり、にこにこ鍋持ちをしていて下さったことを覚えています。にっくき上級生に、食当の1年生がコバイケイソウを刻んだ話も、その時聞いたように思います。明日に中秋の名月となる月は、山々を皓々と照らしていました。便所もいいけれど、こうやって…も、まあ。

下ネタへ落ちたついでに…私、隠れ場所を探したり露出したり、絶対女は損だと思ってました。そう言ったら、宇野さん「女は誤魔化せるけど、男はすぐどっちかばれてしもうやん」。へーなるほど。発想違うなぁという発見以上に男ってデリケートなんだと発見。いや、そんなことあらへん。あの養蚕小屋では、窓際から皆済ませやがって…。バリバリの靴履いては外へ出るのは恨めしかったもんだわよ…ああ、「養蚕小屋」がキーワードになる世代ってのも、限られてるのよね。

日頃はちっとも思い出さないことが、芋蔓をたぐるように出てくる…それが山小屋です。

10月4日（日）

「起きて下さい！ダムから歩かんなんのですよ！」山小屋へ来ても女房役です。辰野さんも大島さんも、休日なのにお仕事。山小屋からご出勤なんて、これまた現役時代には考えられなかったシビアな現実です。

「ダムのおっさんが送ってくれんかなあ」（ダムと崩壊地点を往復の、職員用の車があった）とブツブツ言いつつご出立。

そう言えば、四年の新トレだっけ。松林さんと私、月曜の授業に欠ける訳にはいかなくて、二人早立ちしました。ダムで「運よく」パトカー（何の事件でいたのだろう）を見つけ、乗せてもらいました。「運よく」と思ったのは最初だけ。街中に入り、パトカーも非常時ではないのだから、朝の渋滞に巻き込まれる。外からじっと注がれる好奇の視線の数々、ああ、何か囁いている…顔もこわばり、小さくなってますます犯罪者風情になってしまった二人でした。あれから、救急車には二度乗りましたが、パトカーはあれっきりです。

さて、小屋の方はクレオソートを塗布したり、セメントを補充したり。塗ハケがないないと探し回ったあげく、枝の先に軍手を針金でくくりつけて代用としました。「あれは確か…」と各自の記憶をつなげて、それで出てきたり、迷宮入りだったり…それならこうしようと工夫してうまいうまいと喝采したり。この感覚は学生時代というよりもっと昔、群れる友達がいて、何もかもをワイワイと遊びの材料にしたそんな頃にむしろ似ています。

さて私は年に2回のご奉公、河原からの階段を補修することにしました。小鍬でステップを刻んで…要するに削っては下へ落としていくんだから、流水で土が流されていくのと究極やってることは変わらんなぁと汗を流していると、駆け登ってくる足音。

わっ、奥名さん。金曜日の「ごめん。また一つ葬式が入った」の電話で、今回は来れないと思ってたのに。駒帰から日帰りになるじゃん。OB会長を廻しただけでも、責任感じてるのに、「こんな無理して…次の会長の成手がいなくなっちゃうよ！」と悪態つきながら、でもとてもとても嬉しかった私。

便所の方は、これ以上進めても雪の餌食になりそうでおしまいとし、小屋仕舞いに専念しました。

帰りの長い長い林道は、くるみ拾いの強欲おばさんに。屈んだら頭の方へザックがずり落ち

15佐野　15奥名　　13吉田　3田村
（15舟田は、せめて「映像」は控えます）

そうなのに、目前のくるみをヒョイと転がされたり…ンニャロ！童心に帰る一時。もう数時間後には、お父さんお母さんで、名刺を持った社会人なのにね。

皆の集めたくるみも全部もらって、来る時より荷重く帰宅した節ちゃんでした。

おまけ 秋の白山

「やまざと」って、読むのは好きでも書くのは…がメインの読者層らしいです。いろんな人が書いてくれたら、私も筆を控えられるんですが…。読んでいただけたら、多少は行間に重なる思い出もあるんじゃないか…と、性懲りもなくしたためます。

10月10日（土・祭日）

やっと晴マークが並んだ秋の一日。別当出合へ向かう。今日ナカオの5名は、「白山（越前）禅定道」（観光新道の尾根の続き・市ノ瀬までの旧道）の復元状況を確かめに行くのである。尚、正確にはナカオの4名プラス、大コブと称して憚らない舟田氏1名である。

（この大コブは時として、ワンゲルの同期会にもついてきます。私としては、「ワシモ族」「濡れ落葉族」に思えなくもないんですが、「あんないい旦那さんはおらん。節ちゃんは感謝せにゃいかん。」なんて説教する同期もいます。ルセエ！日頃立てて、立てて、立て尽くしている結果やねん。）

今日は下山予定側に一台置いていくつもりだった。ところが、市ノ瀬でシャットアウト。夏山みたいに誘導されて、「なんでぇ？」と思ったら、すでに駐車場は満杯状態なのだった。それも県外車がズラリ。

シャトルバスに押し込められても今浦島の心地。あたしゃあ天下のナカオ山岳会、こちとらの知らん間に取りつけ騒ぎでもおきたんかいな？（実際、ある知人は室堂改築があるから今年のうちにと慌てて、同日登っていたのだそう。）別当出合も夏山と同じ喧噪状態。秋山って多少は通の、静かな山が楽しめる世界だった。宇宙まで続いていると実感できる澄んだ空、じっとり濡れる草紅葉、時として走りぬける冬毛のオ

コジョ…これらはもうちょい晩秋のシーンだけれど、静寂が何ともいえず琴線を震わせた。なのに砂防新道は数珠つなぎ。自分も立派に中高年で、喧噪の一員でありながら、白けた顔で観光新道へ向かう私であった。

さて観光新道の方は、懸念の溝状の滑り易い急坂に巻き道が増え、岩止めも施されて、随分歩き易くなっていた。汗ばむ陽気の青空には汚物運搬のヘリが飛び交い、シーズンの終わりを告げている。ああ興醒め。自然を愛すと言いながら自然の最大の脅威は人間なのだもの。

今日調査の箇所も、自然に帰ろうとしている道に大義名分をつけて、復活しようとするもの。砂防はオーバーユース。他の既存の道はアクセス悪く、長く、利用しきれていない。それぞれを未解決のまま、新しいことでなければ「仕事」にならない、予算がつかないとばかりまた白山が刻まれていくのは何か悲しい。山を歩けば、予算がついた年だけ大がかりにやって後はほったらかしの遊歩道になら山ほどおめにかかる。藪に埋もれたベンチ、吸殻入れ、柵…最初から不用のものが、不用と判りきっていても設置され、不用のままにうずもれる。こんなばらまき方しか山村の民が食べていく道はないのだろうか？

観光新道の尾根に入る所、ここから下の尾根続きが今日の仕事。通行不可と締め切ってあり、その為二人が、免罪符の腕章を携帯している。その本日の最高地点で大休止をしていると、何と栂さん夫婦が上がってきた。山で知人にでくわすのは嬉しい。というより、基本的にワンゲルの人には山で会いたい。どの山がどう、誰がどこそこへ行ってね、なんて話を同じ風に吹かれながらやっていられたら、それが最高だと思う。

ともあれ、白山に関しては、毎度上馬さん・栂さんは行政側委員として加わっているし、民間代表にはナカオの林代表が加わっている。つい最近もこの道を話題に含む会議に同席しており、この後にも、報告会の予定があったらしい。私はただのおばさんなのに、山に関しては、双方からトップ情報がもらえる、かなりおいしい立場である。（いえ、日地出版か、昭文社かと携帯する地図に気を遣うこともあります。）

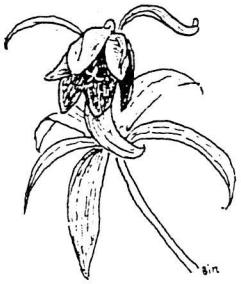
道の方は大がかりにやってある箇所もあれば一冬持つか疑問の所もあった。湿原らしき所、このルートならではの位置による展望、尾根歩き部分の気分の好さ…しかし、利用者は？今時の登山者は、登山の世界に入りこみながら、軽薄短少。いわゆる３Ｋ（汚い、きつい、危険）も、「きれい（清潔）」「軽い」「健康的」の新３Ｋへと変貌している。おばさま方を満足させるよほどの付加価値がないと（下山地点に料理のおいしい秘湯がある、より後のアクセスが便利など）、遠回りして時間をかけて結局アクセス変わらずのこのルートが選択されると思えない。どうせ刻むなら、顧客満足、利用される道でなければ…。

おっと本日は、そんなお薦めでの伝承の岩や痕跡を探すのが目的だったらしい。幸い、岩屋を見つけ、廃物棄釈の破壊の跡を確認した。道がちょっと枝別れのように見える度、林代表は遙拝の跡ではないかと確認しておいでた。この根気とそして博学には毎度脱帽。泰澄大師にまつわる調査の時も、図書館通いをされて、私達はただ金魚の糞でお寺巡りに同伴しただけだった。いつでも学べること、テーマを持って山を続けることを教えてもらった。ワンゲルは人が交替していくことで続いている。社会人山岳会はそんな交替がないことが長所の反面、急所にもなる。ただ好きだけでは続かない。

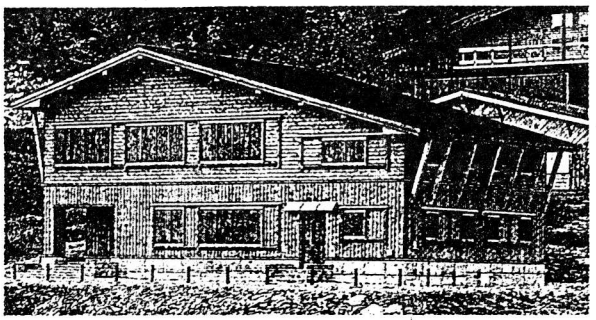
最後の六万山の急階段も、自然に堪えるとは思えなかった。高三郎の整備は効率よくないけれど、地形をよんだ踏跡が重なって路になる程度で、それでいいのだと、機材を見上げて思った。茸の少ない今年、さすがにこのルートではいくつかの発見はあったらしい。林代表は何かと栂キノコ博士に尋ねておいでたが、キノコへの食気のない私はなおさら記憶回路が働かない。

林道を歩き辿りついた市ノ瀬では、さらに路上駐車の列が伸びていた。その晩の室堂宿泊者数は今年最高だったらしい。ハード面で、白山

には緑のダイヤモンド計画の予算がつき、建造ラッシュといったところ。これを愚挙としないために、もっともっとソフト面での知恵が待たれる白山である。



北國 平成10年（1998年）11月6日 （金曜日）



完成した南竜ケ馬場セントラルロッジ＝石川県白峰村

白山登山に憩いの施設

南竜ケ馬場ロッジが完成

石川県が「白山緑のダイヤモンド計画」の一環で白山・南竜ケ馬場地区（白峰村）に整備していた休憩・野営場管理施設「南竜ケ馬場セントラルロッジ」がこのほど、完成した。来年七月ごろに利用開始する予定で、自然解説員の配置など自然体験基地としての機能を充実させる。

ロッジは鉄骨二階建て、延べ床面積約三百三十平方㍍の規模で、白山の自然を紹介する展示コーナー、自然解説員らが詰めるボランティア室、休憩室などが整備された。約三億円を費やし、昨年度から建設を進めていた。

標高約二千㍍に位置し、付近には湿地性の高山植物やアオモリトドマツの林など多彩な自然景観が広がっている。

岩間温泉に休憩所

県、12年オープン 露天ぶろのそばに

白山国立公園の登山口に位置する石川県尾口村の岩間温泉元湯付近に、二十四時間利用可能な休憩施設がオープンする見通しとなった。県は五日までに、同温泉を源泉とする露天ぶろのそばに休憩室やトイレなどを備えた「岩間休憩所」を建設する方針を決めた。年内に着工し、平成十二年度の開所を目指す。

建設場所は白山山頂につながる登山コースの入り口にあたり、特別天然記念物の岩間噴泉塔群に向かう通過地点ともなっている。県は登山者層が限られていた白山北部の雄大な自然をアピールする狙いで既に一帯の登山道の大規模改修に入っており、休憩所を登山道の利用につなげる拠点として活用する考えである。

岩間温泉元湯から約百五十㍍離れた露天ぶろは、建設する休憩所から約三十㍍の距離にあり、休憩所を更衣室がわりに使用すれば、手軽に大自然の中で入浴が楽しめることになる。休憩所は太陽光発電を採用し、夜間照明にも利用される。